成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義Ａ

2012年　**和本で見る書物史**

第４回　書物の歴史（中世　書物の伝存）

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

和本入門　pp38-42,47-55、『和本への招待』第二章「中世の本づくりを担った人びと」参照

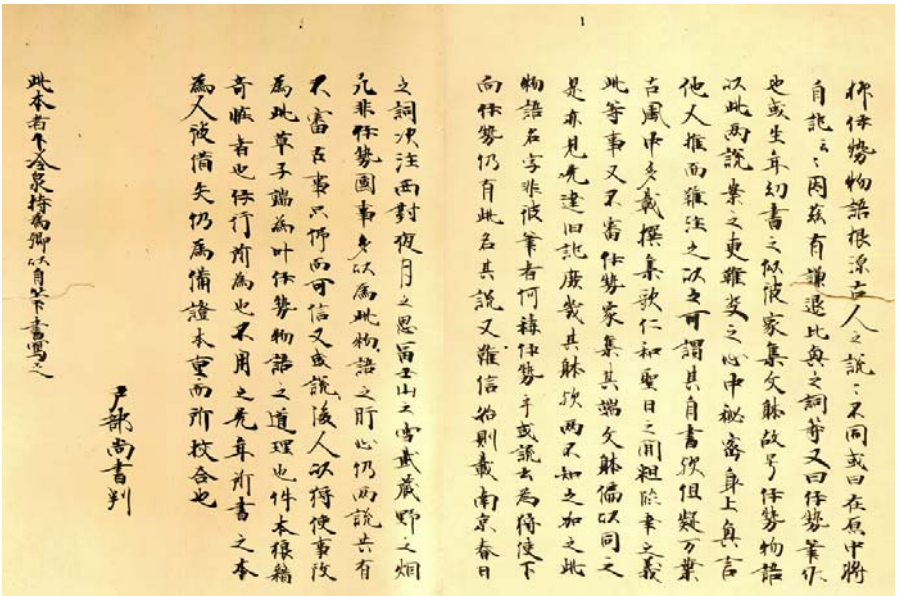
平家の時代から戦国時代の末までを中世という

平安時代の末期、天皇の上に「院」が君臨する政治の形（院政）となった 1100 年代から、豊臣秀吉によってほぼ全国統一された 16 世紀末までを中世という。（諸説あるが）500 年も続いたことになる。
この長い中世の間に培われた技術・意識の積み重ねは重要で、現代人の書物観にもその影響を残している。

写本とは

印刷された本（**版本**（はんぽん））に対して、手書きの本を**写本**（しゃほん）という。古代の歌集・物語・記録などが今でも残されているが、すべて写本である。印刷されたのは、ごくわずかの仏教関係書だった。中世の書物史は、その写本の重要性にあるといってもよい。それは手書きの本といえどもメディアである、ということである。
書物が千年続く意味は、連綿と「書き継ぐ」という仕事を通してなされてきた。

源氏物語が今も読み継がれるのは？　藤原定家の仕事



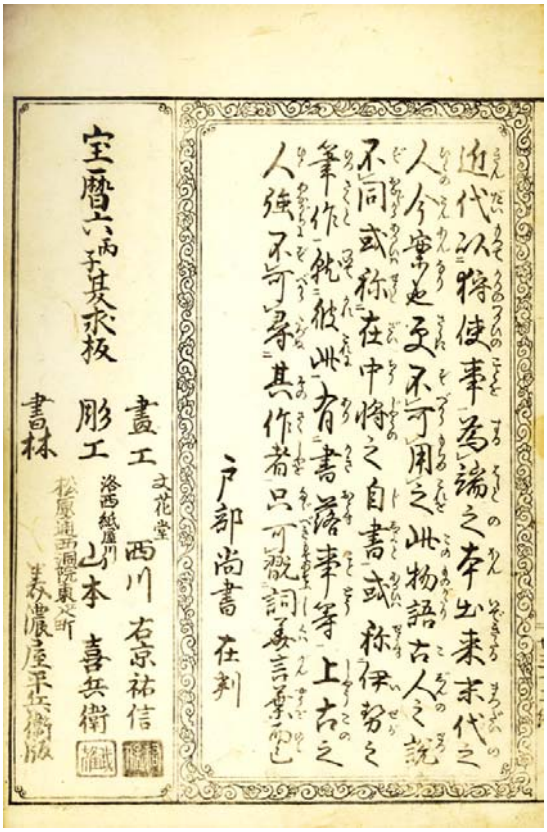
藤原定家が校訂した『伊勢物語』の写し。代々冷泉家が原型のまま写してきた。これは江戸時代のものだが、定家の時代の面影を残す

写本がメディアの力を持っていたといっても、すべてが残されたわけではない。平安時代には、もっと多くの物語があっただろう。しかし、大半の物語は今と同じように短い間に消えてしまったはずである。
また、正しく写しているとは限らない。とくに物語の場合、写す者が意図的に改変してしまうことも多々あった。
そこで重要なのは、すぐれた文学観にもとづいた取捨選択と、正確なテキストの保存である。鎌倉時代のはじめの公家・藤原定家（ていか、1162-1241）がそれを行った。各種の物語・和歌集の注釈と正確な伝本の整理をおこない、善本（証本（しょうほん）という）を残そうとしたのである。

定家は藤原俊成（しゅんぜい）の子として生まれた。代々和歌を専門とした家柄で、歌人としても第一級であり、『新古今和歌集』などの撰者である。官吏として中納言まで登りつめた後、隠居して書物の仕事に没頭した。
『伊勢物語』や『土佐日記』も定家が書写したものの写しが、残されている。とくに『土佐日記』は紀貫之の自筆本が手元にあったようで、巻子本だったその書誌情報が記述されている。以後、定家の子孫（＝現代でも冷泉家（れいぜい））が何代にもわたって書写することを仕事にしてきた。古典文学の本が残るというのは、そういう地道な仕事の積み重ねである。
この後世の写しであっても、定家の時代の面影を残すように、列帖装にして、同じような筆遣いで書いて

いく。

この時、定家が書き残した『源氏物語』は、それまでのいくつかの写本にあった不正確さなどを取り除き、原作に近づける最大限の努力をした。このときの本が青い表紙だったので、**「青表紙本」**と呼ばれ、後世、**定本**としてきた（現代でも多くの本が採用している）。
ただし、正しい写本≒作者の草稿に近い写本「証本」とはいえないところがある。青表紙本には、定家の「こうあるべきだ」という主観が入っているともいわれる。
同じ頃、清和源氏出身の源光行・親行の親子が、同じように『源氏物語』の最善なテキストづくりをしていた。この二人が河内守の役職だったことから、これを**「河内本」**という。最近は、こちらのほうが原文に近いという指摘がされている。



西川祐信が挿絵を描いた『伊勢物語』宝暦六年刊。右側に書かれているのは一種のあとがき。戸部尚書とは藤原定家のことである。

江戸時代の平安物語

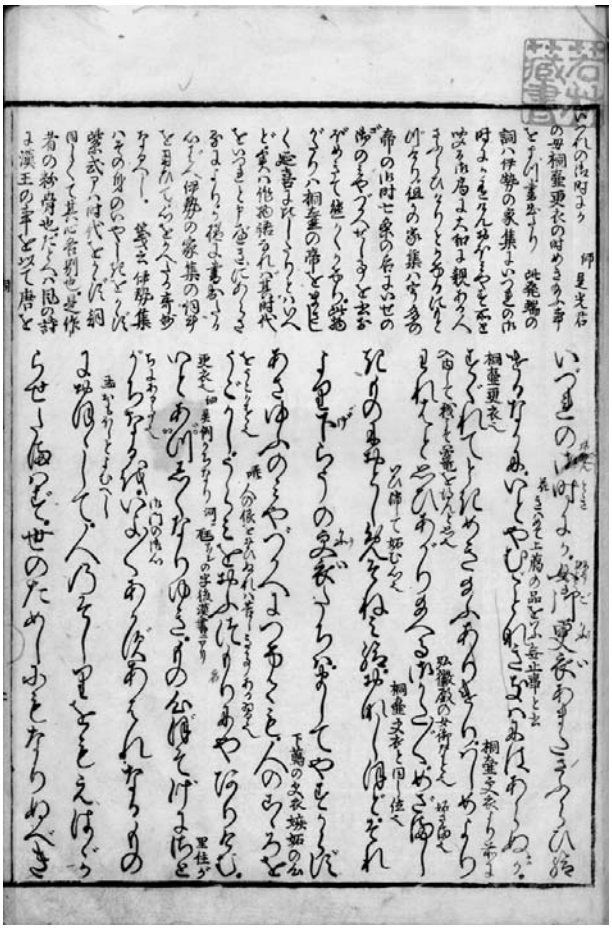
仮名交じり文の物語は、平安時代には草子（草紙とも）とされて格の低い扱いだった。そのため巻子本にする必要がなくて冊子本の新しい形態となったのだった。
やがて、定家や源光行らの努力もあって、主な物語類の正確をきしたテキストが手本として広がると、平安貴族の優雅な趣味への憧れとあいまって、「古典文学」として高い評価を得るようになる。以後、500 年の中世の間、平安の物語はつねに読書と研究の対象となった。恋の物語である『源氏物語』ですら僧侶の注釈書があったほどである。
『源氏物語』や『伊勢物語』誕生から 600 年経った江戸時代に入っても、それは続く。むしろ、上級の子女（公家はもちろん、上級の武士や富を得た大商人など）のために、たくさんの版本（印刷本）がつくられた。そのときの基準となるテキストとして定家本が採用された。おびただしい数の本が江戸時代中つくられた結果、明治以降になってからの文学研究につながった。

寺院の役割

物語や歌集の伝存には公家の力が大きいが、実は書物全体を見ると、もっと強大な寺家の存在があった。中世は、鎌倉政権や室町政権という武家の力が強い社会とみなされてきたが、現実の権力を仔細に見ていくと、そうでないことに気づく。武家はあくまでも軍事面と、地方における土地の支配に力をもっていただけで、すべての権力を持っていたわけでない。公家の力が落ちてきた中で、寺社（寺院や神社）は、経済や文化（書物を含めて）を中心に相当に大きな力を持っていた。

京都・奈良など近畿地方全体には、強大な寺院や神社がいくつもあり、荘園の権利を握り、商人や職人を支配し、さらに僧兵という軍事力までもっていた。
内部はピラミッド型の権力構造があり、その頂点に親王や公卿出身の学侶と呼ばれるエリートいた。その下に武家出身の一般僧がいて、ここまでを僧侶といった。この出身身分の上位が寺院内部でも力を持っていた。その下に大衆と呼ばれる層が寺院中心に形成された都市周辺に集まって住んでいた。

書物の世界からみると、それまで政権の中心にいた公卿は没落してゆき、無骨な武士は文化にあまり貢献していないので、中世の有識者、学者というのはほとんどが僧侶だったことになる。恋の物語である『源氏物語』ですら僧侶による注釈書があった。



『湖月抄』。上段が頭注の形で詳しく解説がある。さらに本文中にも語彙の注釈がある。いずれも中世以来のさまざまな本から抜き書きしているものだ

注釈という研究方法

エリート僧侶の知識人は、本業の仏教の研究に励む一方、中国の文献を学び、古典文学や歴史などの勉学もした。本は彼らによって、保存され、書き写されて伝わった。

寺院は書物を残すことを重要と考え、火事や災害、戦災などには真っ先に経典を始めとする書物を避難させた。

それだけでなく、内容について注釈を加え、読みやすくした。平安時代の仮名遣いや用語が、次の時代にはすでにわからなくなっていることが多かった。それを解説することも注釈の役割だった。

注釈は研究だけでなく、書物を残し、「育てる」役割をはたしたのだ。古典研究というのは、こうした長期にわたる積み重ねである。江戸時代も継続され、北村季吟（きぎん）の『源氏物語』注釈書である『湖月抄（こげつしょう）』では、歴代の主要な注釈を引用しつつ、自分の意見を加えている。

注釈の方法は、元の本に、書き加えていくのが基本的な方法。これを「**書き入れ**」という。さまざまな注の方法があるが、とくに文字の校正を「**校合**（きょうごう）」という。写本は誤字や写し間違いなどが発生しやすいので、この作業は大切。赤字で入れる。

語彙や文意などの解釈は、上段のあきに書き入れる。

したがって、次の読者は、**この注釈ごとまるまる書き写す**。それで学問が継承された。そのために原文に増して本が厚くなってしまうので、抜き書きの本もできる。公家の日記の中から、一定の行事の作法だけを抜いた「部類（ぶるい）」などはその例。

参考文献

冷泉為人『冷泉家・蔵番ものがたり』2009、ＮＨＫブックス

三谷邦明・小峯和明編『中世の知と学―注釈を読む』1997、森話社

小川剛生『中世の書物と学問』2010、山川出版社、日本史リブレット 78

網野善彦『日本の歴史をよみなおす』2005、ちくま学芸文庫

五味文彦『書物の中世史』』2003、みすず書房